

〔目的〕 幼児の食味嗜好は成人との間でもかなり相違するが、その両親との間でも類似度に相当の幅が見られる。そこで、幼児の食味嗜好の形成に対して体質遺伝と成育環境のいずれがより強く影響しているかにつき、血液型体質を拠り所にして検討を加えた。

〔方法〕 甘、酸、塩味食品各5、計15品目を選び、それぞれ5段階の嗜好尺度を設け、その嗜好度を幼児、父、母別に求め食味別に集計した。この際、それぞれの間のABO式血液型による親子間の体質的類似性と嗜好類似度とを照合した。

〔結果〕 両親間の血液型が異なっていて、父-子間の血液型が同一の家族約120例を選び、食味嗜好性が、1) 父-子間で類似、2) 母-子間で類似の2群につき、1)の傾向が犬ならば幼児の食味嗜好に対して遺伝的因子が犬、2)ならば環境因子の影響が犬であると判断した。その結果、甘/酸比では父-子間に体質類似性があるのに味覚嗜好上の相関が意外に低く、母-子間では体質上相違があるにもかかわらず、ある程度の相関が認められた。また父-子、母-子間の各相関係数の間には5%有意差が認められた。さらに甘/塩比、酸/塩比における父-子および母-子間の相関はいずれも低かったが、これらにおいても母-子間の相関が父-子間のそれよりも高い傾向が見られた。幼児-母親(成人女子)では甘味嗜好において若干の近似性があり得ることから、特に酸/塩比における上記結果は幼児-女性間の甘味嗜好性を離れて、母子間の味覚的相似を検証する上で注目される。

以上のことから、幼児の味覚は親子間の遺伝体質を上まわって、母親が築く家庭の食生活環境に強く影響されることが示唆される。